栗木内遺跡出土の八稜鏡について

香川　愼一

1　はじめに

福島県文化財センター白河館では、平成24・25年度復元品製作研究として、福島県石川郡玉川村の栗木内遺跡から出土した鏡･鏡箱の復元品製作を実施している。栗木内遺跡出土鏡（以後、「栗木内鏡」とする）は、いわゆる「瑞花双鳥八稜鏡」で、鏡背・鏡面に漆被膜が付着していた。この漆被膜は布に漆を塗ったもので、栗木内鏡は乾漆状の容器に入れられていた可能性が想定されている。

栗木内遺跡の調査報告書(註1)では、栗木内鏡は平安時代の竪穴住居跡から出土したとする。しかし、栗木内鏡の年代観が竪穴住居跡の出土土器よりも新しい可能性があり、また、鏡の出土地点が楕円状に広がる「焼土・炭化物集中範囲」（図３）と重なっていることから、同報告書では他遺構との重複の可能性も示唆している。

そこで、本稿では、栗木内鏡の出土状況や鏡の特徴等について整理を行い、得られた所見から栗木内鏡の性格について検討を行いたい。

2　栗木内遺跡の概要

栗木内遺跡は、福島県中通り地方の南部、玉川村大字蒜生字栗木内に所在する。栗木内遺跡の立地は阿武隈川右岸の段丘端部であり、栗木内遺跡の頂部からは、北流する阿武隈川と氾濫原を西に見渡すことができる。栗木内遺跡の西方約650ｍにある独立丘陵状の高台には、切石積式横穴石室で終末期古墳の宮ノ前古墳、また天平15年銘の木簡や平安時代の三間四面の掘立柱建物跡が発見された江平遺跡(註2)など重要な遺跡が集中しており、同高台が古代における地域の要衝であったと考えられる。

栗木内遺跡の発掘調査は平成12・13年度に行われ、古代の竪穴住居跡が40軒検出された。ただし、遺構確認が壁・床面の一部にとどまり、住居構造が不明なものも多い。なお、竪穴住居跡の時期は出土土器から５世紀末葉～11世紀前葉に位置付けられ、集落の盛期は９世紀後葉～10世紀前葉とされる。

図１　遺跡位置図（1/25,000）

栗木内遺跡の地形は、南北に延びる馬の背状の尾根筋から、東西へ比較的急な斜面が分かれている。栗木内遺跡の西側斜面は段丘斜面であり、傾斜が比較的緩やかとなる裾部に古墳時代の

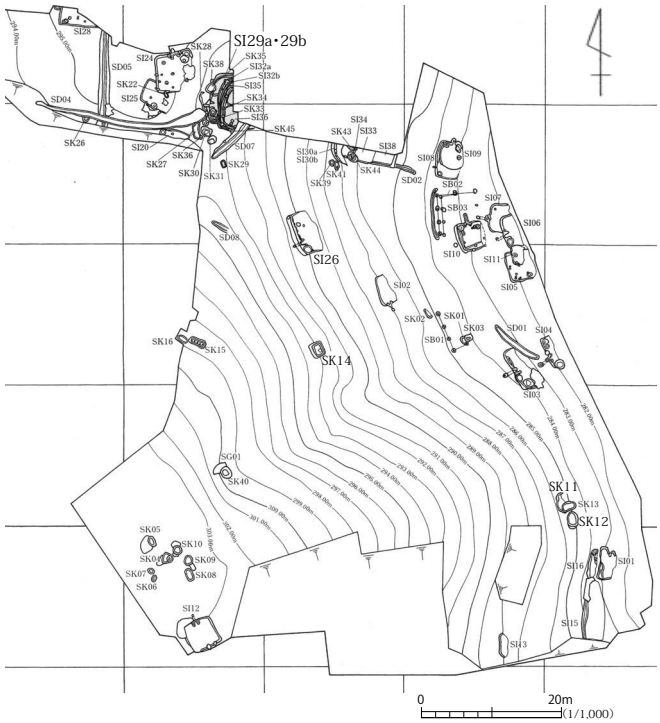

図２　遺構配置図（東側斜面部）

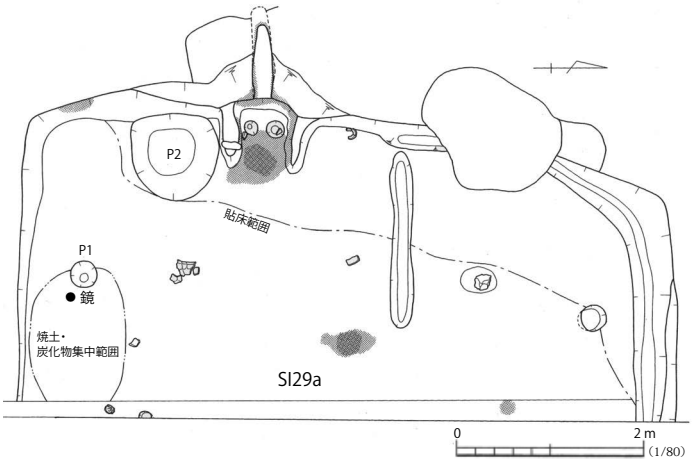

図３　29a 号住居跡

竪穴住居跡が構築されている。

一方の東側斜面は、小支谷の貫入によって形成されたもので、平安時代の遺構は主にこの東側斜面に立地する（図２）。したがって、古墳時代の竪穴住居跡は阿武隈川方面に向き、平安時代の竪穴住居跡は、東方の阿武隈高地から続く山間地帯に向いている。

栗木内遺跡で発見された平安時代の竪穴住居の内、６・８・26・29号住居跡（SI06・08・26・29）は、カマドが西壁の南西コーナー寄りに偏在する特徴がある。10 世紀後葉～ 11 世紀前葉に位置付けられる15・16・30 号住居跡（SI15・16・30）は、いずれも遺存状態が悪く構造の不明なものが多い。

他に平安時代の遺構としては、東側斜面の中腹～裾部で検出された 11・12・14 号土坑（SK11・12・14）が 10 世紀前半頃の土坑墓と考えられている遺構で、各掘形の長軸は概ね南北方向に向いている。11 号土坑の南端部から、土師器の高台付杯が出土している。

３　栗木内鏡の出土状況について

栗木内鏡は、東側斜面の上端部に位置する 29a 号住居跡（SI29a）から出土した。29a 号住居跡は５軒の住居跡（29b・32a・32b・35・36 号住居跡）と重複関係にあり、その中で最も新しい遺構とされる。栗木内鏡の出土地点は、住居跡南部の P1 東隣である（図３）。

SI29a の床面上は焼土・炭化物を含む人為堆積土で覆われていたとし、特に栗木内鏡出土地点の付近から「焼土・炭化物集中範囲」が検出された。栗木内鏡の出土状況写真を見ると、長方形に近い楕円状の黒色範囲が明瞭に確認できる。この焼土・炭化物集中範囲の外縁に乱れた様子がないことから、床面上に堆積する炭化物というよりは掘形埋土のような印象を受ける。

また、時期が比較的近い６・８・26 号住居跡の南西コーナーが、カマド傍の貯蔵穴を巡る

ように方向転換しているのに対し、29a 号住居跡の南西コーナーは、貯蔵穴（P2）からさらに約 1.1 ｍの地点で方向転換している。もし、南西コーナーが他の住居跡と同様に P2 付近であったとすれば、栗木内鏡出土地点は 29a 号住居跡外となる。なお、26・29a 住居跡の北西コーナーから貯蔵穴南端までの距離はともに約 5.8 ｍである。

写真１　29a 号住居跡（南から）

29a 号住居跡と焼土・炭化物集中範囲が別遺構である可能性は、すでに調査報告書で指摘されているが、同範囲が掘形を持ち栗木内鏡がその底面付近から出土した可能性は、出土状況を見る限り十分に考えられる。

この焼土・炭化物集中範囲は長軸・短軸がほぼ東西・南北を向き、その規模は長軸が遺存値で約1.5ｍ、短軸が1.2ｍである。栗木内鏡は同集中範囲の西端から約30㎝の地点で発見され、炭化物層の下で鏡背を上に向けた状態で出土した。出土状況から、鏡背の双鳥は概ね南北方向に並ぶようであるが、意図されたものかは分からない。

栗木内鏡の出土地点は、29a 号住居跡及び 32 号住居跡にかかる範囲である。32 号住居跡（Ⅱ－３群土器）の時期は、出土土器等の検討から９世紀後葉～ 10 世紀前葉とされており、栗木内鏡が埋納、または埋没した時期の上限を一応９世紀後葉としておく。なお、重複関係の中で最も新しい 29a 号住居跡（Ⅲ群土器）の所属年代を 10 世紀中葉頃としている。しかし一方で、同住居跡から出土した長頸瓶を上雨屋 112 号窯式期に比定し、またⅡ－２群土器の耳皿とⅢ群土器の杯の高台部の類似性から両群の時期が近接している可能性も指摘している(註3)。なお、29a 号住居跡の堆積土から出土した炭化種子の炭素年代は、西暦 900 年を確立分布のピークとし、95％信頼限界の年代は西暦 790 ～ 990 年である(註4)。

４　栗木内鏡の概要

栗木内鏡の外形は、弧がやや緩やかな八稜形を呈する。面径は、9.9 ㎝前後である。外縁の断面は、三角形に近い。界圏は円形で、内外区に高低差はほとんどなく微細な凸線によって両区が画されている。外縁の一部が欠損しているが、その端部が丸みを帯びていることから調整が施された可能性もある（写真３）。鏡背文様は不明瞭で判然とせず、経年劣化に加えて踏み返しの影響も指摘されている。

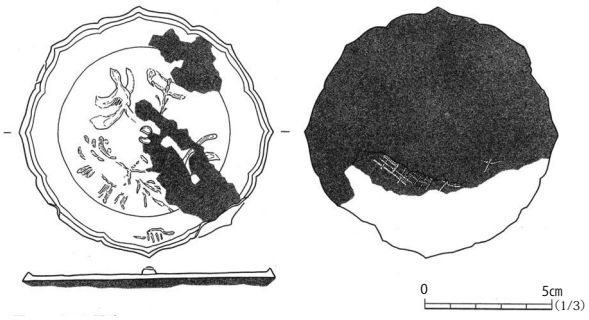

図４　栗木内鏡実測図

栗木内鏡の双鳥文は、鈕を中心として約 160°旋回で配されている。したがって、

写真２　栗木内鏡

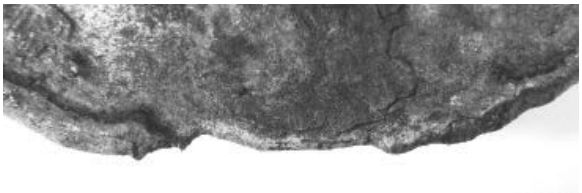

写真３　外縁欠損部

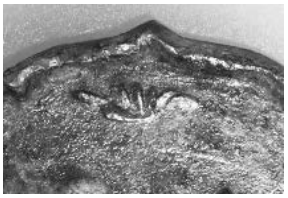

写真４　外区文

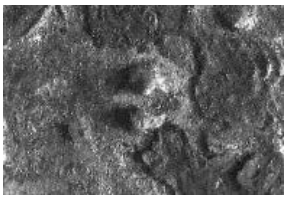

写真５　鈕

写真６　鏡面付着物（鏡面側）

双鳥文の位置は正確な点対称ではないため、鳥文間にある２ヵ所の内区瑞花文の幅に広狭が生じている。

瑞花文は判然としないが、鈕側から上方に短い茎が延び、その上端から大柄な葉が左右に開いているように見える。鳥文は両翼を広げ、嘴を外区に向かって突き上げている。頸部にねじれがないように見えることから、頭部は右顔面が描写されていると思われる。鳥文の尾羽は概ね横位方向に延び、その上縁が波状になっている可能性がある（写真７・８）。

外区文も全体的に遺存状態が悪いが、波頂部下に子葉状の点文が組み合わさった小雲風の文様が観察される（写真４）。鈕は、頂部を欠損している。鈕の平面形は、遺存部の形状から楕円形であった可能性がある。鈕座は確認できず、劣化や踏み返し等の外的影響による消失か、または素鈕の可能性がある（写真５）。

栗木内鏡は、蛍光Ｘ線による金属分析と付着物の科学分析が行われている(註5)。蛍光Ｘ線の結果、栗木内鏡の主要成分は銅・ヒ素・鉛・錫であることが判明している。しかし、各成分の比率は不明である。なお、栗木内鏡の錆化による腐食の進行が指摘されており、Ｘ線透過像(註6)でも地金の遺存状態が悪いことが分かる。

栗木内鏡の漆被膜については、編み物状の布を胎とし、その表裏に漆が塗られていることは鏡発見の時点ですでに確認されている（写真６）。

科学分析の結果、編み物状布は大麻製の可能性が推測されている。この編み物状布の糸密度は１㎝あたり「４本弱から６・７本」程度と目が粗いが、表面に絹布が貼られてお、

写真７　鳥文

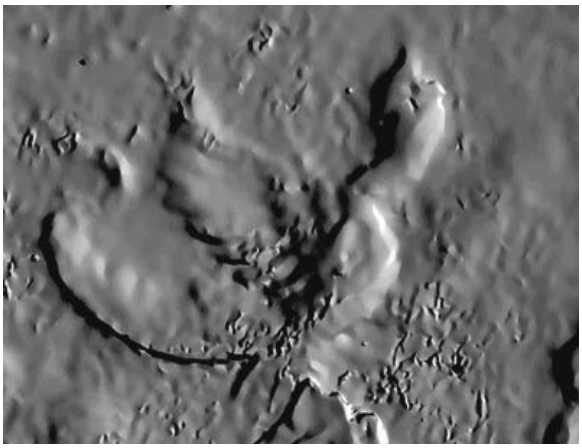

写真８　鳥文３Ｄ計測図 (註７)

布着せ的な補強が施されている可能性もある。栗木内鏡の漆被膜は、胎からいわゆる乾漆の可能性もあるが、「胎部への漆使用度がやや貧弱であり、むしろ中世の烏帽子の製作技法に通じる」という指摘がされている (註８)。

5　栗木内鏡の検討

栗木内鏡の出土状況から必ずしも 29a 号住居跡の共伴遺物とは限らず、調査報告書でも消極的な記載が目立つ。発掘調査の成果から推測される栗木内鏡の上限を９世紀後葉としたが、八稜鏡の特徴から見た年代観とは「ずれ」が生じているという指摘もある (註９)。

なお、福島県内から出土した瑞花双鳥八稜鏡は、栗木内鏡を除いて今のところ４例程が知られる。栗木内鏡と同様に内区の葉文が茎の端部から大きく左右に開き、双鳥文が鈕を挟んで外向きとなっている八稜鏡には、白河市茂ヶ崎遺跡出土鏡 (註 10)、郡山市馬場中路遺跡出土鏡 (註 11) がある。馬場中路遺跡出土鏡は、竪穴住居跡の小穴から出土したもので、出土土器から 10 世紀末葉～ 11 世紀の年代が考えられている。

瑞花双鳥八稜鏡の型式変化について明らかにしたのは杉山洋 (註 12) で、９要素の観察からⅠ～Ⅶ式に分類されている。唐式鏡の鳳凰（鸞）を祖形とする双鳥文がⅠ式の９世紀前半からⅤ式の 11 世紀代まで続き、Ⅵ式の 12 世紀初頭頃に鳥文は鴛鴦へと変わる。八稜鏡における双鳥文の配置は、対面から鈕を中心として点対称に旋回する構図へと変わり、さらに体位・頭位の向きが変化する。

杉山分類Ⅲ式（10 世紀前半）の鳥文の頭位は右顔面を見せるが、Ⅳ式（10 世紀後半）では頸を後方にねじり左顔面を見せる。また、Ⅲ式とⅣ式では尾羽の向きが上方向から横位方向に変化する。栗木内鏡の鳥文は右顔面を見せるものの、尾羽の向きは横位方向に近い。調査報告書では、栗木内鏡を「Ⅲ式とⅣ式の中間的な様相」とするが、鳥文を見る限りでは矛盾がないように思える。

しかし、他の要素の観察では、内区瑞花文の簡略化、外区文の点文化、素鈕の可能性などを含めると、鳥文がやや古式であるものの、その他はⅣ～Ⅴ式の特徴に近い。したがって、八稜

鏡の特徴から導き出される栗木内鏡の年代は10世紀後半～11世紀代と推測され、栗木内鏡が出土した周辺の住居跡の年代よりも新しいと考えられる。

栗木内鏡の性格を特徴付けるのは、漆被膜の付着である。この漆被膜については、鏡箱、または鏡容器の可能性が高いと考えられる。しかし、鏡箱が乾漆製と推測される類例は、長野県吉田川西遺跡(註13)、京都府安朱遺跡(註14)と非常に少ない。他に鏡箱ではないが、奈良県岩屋古墓(註15)から乾漆と推測される漆小箱が出土している。なお、平安時代以降、副葬された鏡に鏡箱が伴う例は数多く知られ、千葉県印内台遺跡から出土した12世紀前半の瑞花双鳳五花鏡・梅花文鏡筥は復元模造が行われている(註16)。

6　栗木内鏡の性格について

東日本を中心に平安時代の集落遺跡・墳墓・宗教遺跡から出土した鏡について、集成と分類を行ったのは菊池誠一である(註17)。鏡が出土した集落遺跡は、以下の３タイプに分けられている。

・１タイプ：山麓や地域内の高所にある規模の小さな遺跡
・２タイプ：低地や扇状地にある規模の小さな遺跡
・３タイプ：その地域の政治・中心地域にある大規模な遺跡

栗木内遺跡は、上記の分類に従えば１タイプであろう。ちなみに郡山市の馬場中路遺跡は、２タイプに位置付けられている。馬場中路遺跡は、出土した土器の特徴から修験と密接な関係があるとされ、鏡が出土した４号住居跡についても密教との関連性が指摘されている。菊池は、１・２タイプ遺跡における鏡の出土について、馬場中路遺跡を含む複数の事例から「祭祀的な様相」が窺えるとする。また、同祭祀は10世紀後半頃から始まり、11世紀頃には全国的に拡散したとする。

菊池が指摘した小規模集落における八稜鏡を用いた祭祀について、杉山は、東日本における「八稜鏡祭祀の広がりを前提として、男体山のような八稜鏡を多用する信仰の山が生まれた」とする(註18)。

しかし、墳墓で発見された八稜鏡の性格については、化粧道具の副葬として理解されていることが多い(註19)。また、経塚で発見された鏡も、鏡箱や布・紙に包まれていたものについては、破邪を目的とするものではなく、化粧道具の副納として解釈されていることが多い(註20)。

したがって、漆製の容器に入れられた栗木内鏡の性格は、化粧道具の副葬、または副納と考えられるが、楕円状のプラン内から出土したことから墓に伴う副葬品であろう。

次に、埋葬施設の場合の頭位を考えてみる。岩屋古墓・吉田川西SK128、千葉県文脇遺跡土壙墓(註21)など平安時代～中世の土葬墓は、頭位を北枕にしている事例が多い。一方、栗木内遺跡の楕円状プランは長軸が東西方向を向くが、同様の事例には福岡県門田遺跡木棺墓、福島県古宿遺跡Ⅱ区24号土坑(註22)などがある。鏡は頭～胸付近で発見されることが多いため、鏡の位置から門田・古宿遺跡例は東枕、栗木内遺跡例は西枕であったと推測される。

栗木内遺跡の楕円状プランは、炭化物で覆われていた。このことから、木炭を覆土としてい

た可能性があるが、いわゆる木炭槨は時期的に一致しないので想定しづらい。

栗木内鏡を入れた容器の形状は不明である。杉山分類Ⅳ式の吉田川西遺跡出土鏡の鏡箱は、八角形であった可能性が推測されている。他に宮城県山王遺跡から 10 世紀前葉の八角形の漆器皿が出土しているが、木地に漆を塗ったものである(註23)。栗木内鏡の容器は、他の事例から円形、または八角形の可能性があるものの、烏帽子の製作技法に通じるという指摘から、袋状であった可能性も考えられる。

7 ま と め

東日本における八稜鏡の性格は、出土遺構が竪穴住居跡であれば馬場中路遺跡出土鏡のように祭祀や法具としての可能性が、墓であれば化粧道具等の可能性が考えられる。したがって、同様に栗木内鏡についても、出土した遺構によってその性格が大きく変わってくることになる。

今回、栗木内鏡・鏡箱の復元製作にあたり、その出土状況から確認作業を行った。栗木内鏡の出土地点は、複数の遺構が重複しており複雑である。しかし、調査報告書には、栗木内鏡を 29a 号住居跡出土としながら、他遺構の可能性も示されている。

栗木内鏡は、その特徴から杉山分類のⅣ～Ⅴ式に類似すると思われる。東日本において八稜鏡が顕在化するのは10世紀後半～11世紀代であり、栗木内鏡も概ね同様の時期と推測される。栗木内鏡の性格については、墓の副葬品の可能性が考えられ、西枕の頭位付近に埋納されたと推測される。八稜鏡の出土遺構は、東日本では、かつて建物跡や祭祀遺構からの出土が特徴的とされていたが、墓の副葬品例も増加してきている。

栗木内鏡は鏡面を下にして鏡箱（容器）に入れられたと推測されるが、化粧道具として埋納されたかは分からない。辟邪の呪具として墓に鏡を副葬する葬送習俗は、弥生時代～近世まで続いたとする説もあり、その可能性を再確認する必要があるだろう(註24)。

福島県から出土した和鏡で、墓から推測したと考えられる遺跡には、先の石川町古宿遺跡や、近世の柄鏡であるが新地町師山遺跡(註25)がある。古宿遺跡の和鏡は、「松喰鶴鏡」に「竹垣双鳥鏡」が重ねられた状態で出土している。他に喜多方市荒屋敷遺跡から出土した平安時代と推測されている和鏡は、絹布で包まれていたようであり、その性格を再確認する必要があるだろう(註26)。

最後に、栗木内鏡について、奈良文化財研究所の杉山洋氏、中川あや氏から、ご多忙中にも係らずご教示をいただきました。ここに感謝の意を表します。

＜註＞

（註１）能登谷宣康・佐藤　啓ほか　2003　「栗木内遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告 14』福島県教育委員会

（註２）福島県教育委員会　2002　「江平遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告 12』

（註３）前掲註１第３章。

（註４）前掲註１ 付章７。小林謙一・今村峯雄「福島県玉川村栗木内遺跡出土炭化種子の炭素年代測定」

（註５）前掲註１ 付章８。永嶋正春「福島県玉川村栗木内遺跡出土八稜鏡の分析」

（註６）前掲註５と同じ。
（註７）九州国立博物館のご協力により、Ｘ線ＣＴスキャンによる三次元精密計測図を作成していただいた。
（註８）永嶋正春氏は、千葉県西野遺跡で出土した鎌倉時代の烏帽子について、胎が苧麻布で、外表側に絹布が貼られていることが確認している。また、この絹布については、烏帽子の「見える面の漆塗りをより整えるためのもの」と推測されている（2005　「西野遺跡出土の烏帽子片について」『市原市海上地区遺跡群』市原市教育委員会）。
（註９）前掲註５と同じ。
（註10）白河市教育委員会　2001　『白河市史』第４巻資料編
（註11）吉田幸一ほか　1983　「馬場中路遺跡」『郡山東部Ⅲ』郡山市教育委員会
（註12）杉山　洋　1991　「今様の鏡と古躰の鏡－出土八稜鏡より見た平安時代の鏡－」『MUSEUM』№.481　東京国立博物館
（註13）長野県教育委員会　1989　「吉田川西遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３』原　明芳　2010　『奈良時代からつづく信濃の村・吉田川西遺跡』新泉社。なお、原氏は、この著書で、吉田川西鏡が出土した土坑の年代を10世紀前半としている。
（註14）（公財）京都市埋蔵文化財研究所　1996　『平成５年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（註15）山内紀嗣　1988　「天理市岩屋の古墓をめぐって」『天理大学年報』№.157　天理大学
（註16）船橋市教育委員会　2010　『瑞花双鳳五花鏡・梅花文鏡筥の復元模造』。この五花鏡は、鏡筥が蓋側を下になって出土しており、中の鏡の鏡面が上に向いた状態で確認された。このことについて、青木豊氏は、辟邪の可能性も指摘している。
（註17）菊池誠一　1987　「平安時代の集落遺跡出土鏡の性格」『物質文化』№.49　物質文化研究会
（註18）註前掲10と同じ。
（註19）杉山　洋　1999　『日本の美術』№.393　至文堂
（註20）村木二郎　2003　「経塚に埋納された鏡」『鏡にうつしだされた東アジアと日本』ミネルヴァ書房
（註21）青木　豊　1992　『和鏡の文化史』刀水書房
（註22）福島県教育委員会　1998　「古宿遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告25』
（註23）宮城県教育委員会　1986　『山王遺跡Ⅲ』
（註24）内川隆志　2013　『平成25年度特別展　神々の光彩　鏡と信仰』図録　國學院大學博物館
（註25）福島県教育委員会　1990　「師山遺跡」『相馬開発関連遺跡発掘調査報告Ⅱ』
（註26）福島県教育委員会　2005　「荒屋敷遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告５』